

仙台市婦人防火クラブ連絡協議会 ヒアリング記録

日 時 平成24年2月4日（土）14:30～

場 所 仙台市消防局 会議室

参加者 森 妙子 仙台市婦人防火クラブ連絡協議会会長（宮城野地区会長）
仙台市宮城野地区婦人防火クラブ連絡協議会 岩切支部支部長
佐藤 美恵子 仙台市婦人防火クラブ連絡協議会理事
仙台市宮城野地区婦人防火クラブ連絡協議会 港支部支部長
小野寺はきの 仙台市宮城野地区婦人防火クラブ連絡協議会 港支部副支部長

岡 ミチ子 仙台市婦人防火クラブ連絡協議会副会長（若林地区会長）
仙台市若林地区婦人防火クラブ連絡協議会 沖野支部支部長
菅野 文子 仙台市婦人防火クラブ連絡協議会書記
仙台市若林地区婦人防火クラブ連絡協議会六郷支部支部長
浜 邦子 仙台市婦人防火クラブ連絡協議会副会長（太白地区会長）
仙台市太白地区婦人防火クラブ連絡協議会 八木山支部支部長
武田 和子 仙台市婦人防火クラブ連絡協議会監事（太白地区副会長）
仙台市太白地区婦人防火クラブ連絡協議会郡山支部支部長



左から小野寺さん、佐藤さん、森さん



左から浜さん、武田さん、菅野さん、岡さん

1. 背景

仙台市は、人口約105万人・47万世帯が暮らす東北の中心都市であるが、宮城県沖地震の発生を念頭に、防災力の向上が常に重視されてきた地域でもある。

東日本大震災では、宮城野区で震度6強、青葉区・若林区・泉区で震度6弱、太白区で震度5強の揺れに見舞われたが、全体からみて揺れによる建物被害は大きいとは言えず、むしろ太平洋岸を襲った津波により、被害が大幅に拡大した。

仙台市内の被害は、犠牲者が704名、行方不明26名、重症275名、建物の全壊は2万8千702棟、大規模半壊2万4千661棟、半壊6万9千763棟となっている。（仙台市のウェブサイトによる）

仙台市の婦人防火クラブは、6地区に536団体あるが、震災直後から各地域で自主的な支援活動を行っている。それぞれに厳しい条件のもとであっても、力をあわせて大小の避難所支援、在宅避難者支援等を行っており、自宅を失う被害を受けながらも、避難所での相互扶助活動に尽力したクラブ員も多い。

仙台市消防局では、婦人防火クラブの活動状況を把握するため、若林区・宮城野区では5月

から、7月からは市全体の婦人防火クラブにアンケートをとり、まとめている。また、6月と11月に婦人防火クラブの役員会を実施し、12月に各地区の会長参加のもと、意見交換会も実施している。

なお、仙台市消防局によると、揺れの周期が幸いしたのか、倒壊家屋・建物は考えていたよりは少なく、やはり津波がひどかった。本署も停電し、自家発電を2日間動かすが、燃料の重油がもう無くなるかもしれない、というぎりぎりの状況でしのぎながら救命・救助を続けた。山形県の消防機関よりカップラーメン等の食糧支援を受け、3週間ぐらいは連日泊りこみの状態で活動。遺体収容での困難が大きく、他機関との協力のもと、長期間の活動となった。

消防職員の犠牲者はいなかったが、消防団員の方2名が亡くなっている。

ちなみに火災については、市内で直後に発生したうちのほとんどが車からの出火で、3日後に数件の通電火災が起こったとのことである。

2. 詳細

①各地区の状況

宮城野地区

■森 妙子さん（岩切支部 支部長）

七郷と岩切地区は揺れが大きく、岩切支部内の14クラブ中、7クラブものリーダーの方の自宅が被災した。

地区の避難所となった岩切中学校は、当初先生たちだけで運営されていたため、避難せずに済んだ人たちを中心に「岩切ボランティアの会」を発足させ、救護や配給などを行ったが、岩切支部婦人防火クラブでは主に調理のお手伝いをし、3月14日～27日まで、6,543食を提供した。

支部内の各地区では、クラブ員のみなさんが、集会所等の身近な場所での炊き出し支援を行った。

■佐藤 美恵子さん（港支部 支部長）

七北田川南側にある、岡田小学校周辺の婦人防火クラブ員は小学校に駆け付け、2階に備蓄物資を上げたり食事を配布したりといった対応したが、野戦場のような状況だったという。

わたし自身はたまたま別の地区に出かけていて、宮城野区の前町小学校近くの息子一家の家に一晚寄せてもらったが、翌日、前町小学校へ避難するように言われて学校へ行った。屋上にプールがあるので、トイレ用の水を汲もうとの先生の呼びかけに、夜中から明け方まで3回ほど水を汲み、それでし尿の処理をした。

しかしこの時、自宅が無くなっているとは思っていなかったもので、2日目の朝、自宅を見に行き、津波の被害に唖然とした。その夜は再び息子の家に泊めてもらい、学校で朝食の配布を手伝ってから、自宅を片付けに行き、その後もさらに避難所の支援に加わった。

集会所に避難した30人ぐらいの方への炊き出し支援も、近隣の婦人防火クラブ員が3日間実施してくれたが、その後、避難者は学校へ移動した。

学校では、最初の3日間ほどは外部からの支援が殆どなかったのでアルファ米や食料が足りず大変苦労したが、その後は安定した支援が入るようになって助かった。3月20日ぐらいから自衛隊の方がご飯を炊いてくれ、食材も入ってくるようになったので、婦人防火クラブ員がおにぎりにしたり、届いた材料でメニューを決めておかずを作るなどして、毎日支援を行った。

地区ごとに朝昼晩の必要数を炊き出し班に報告してもらい、黒板に記入。その他にも、看護班、受付、消防団、学校教員などの分も記入して、必要な食数を作ったり配膳準備を行った。

ピーク時は1200人、その後は800人ぐらいの人への食事提供を行ったが、避難している人の中にもクラブ員がいて、地区ごとの必要数はその方たちがまとめてくれていた。在宅避難で食事支援が必要なひともいたので、食数をまとめることは、大変重要な役割だった。5月10

日に自衛隊が引き揚げ、お弁当の配給制となるまで、この支援活動は続けた。

被災した人たちは、仮設住宅もバラバラで、アパートなどへの入居、親族宅へ身を寄せるなどで、ばらばらとなってしまっている。

わたし自身も、自宅のある地区の近くに住みたいと物件を探したもののすでにどこもいっぱいで見つからず、現在は若林区の古いアパートで暮らしている。

■小野寺 はきの さん（港支部副支部長）

震災の時わたしは自宅にいたが、ラジオを持って浜辺を散歩していた夫が「6mの津波が来るぞ！」と、避難所となる中野小学校までそのまま避難した方が近かったにもかかわらず、走って家に帰ってきてくれた。這ってはだしで玄関先まで行ってから、避難しようとしたが、近くの企業の倉庫の屋上は従業員の人ですでにいっぱい。しかし学校までは歩いて14・5分かかる。そこへ偶然、車に乗せてくれた人がいて、それで小学校へ向かうことができた。

ところが学校へ到着すると、校舎の中は暗くて大勢の人がいて狭くて大変だった。避難所は2階で、先に上の階の方へ入れた人たちが「津波だ！！」と叫んでいる。

私たちが3階に上がったところへ、2階まで津波が学校に来たので、あの時もしも車に乗せてもらえなかったら、生きてはいなかっただろう。

学校に備蓄があり、町内会長がアルファ化米を作りましょうと声をあげたので10人くらいが集まったが、お湯は無かった。そこで以前水で作った経験があったわたしが、「水でやりましょう！」と言ってみんなで作りはじめた。

膝から下は冷たい水に足を漬けたままという状態で、ローソクの灯りだけを頼りに作業し、最初350食分作ったがそれでは足りず、あとから4~500食作った。暗くて電気を持っているひともしんどい中、みんなケンカごしのような状態で作って配ったが、結局作った人たちは食べられなかった。

翌日わたしたちは、自衛隊の震目駐屯地へ移動したが大勢の人であふれかえっており、体育館の上部にある細い通路に上がってなんとか場所を確保した。自衛隊からは缶詰とご飯一口が提供された。

さらに翌日、内陸の八軒中学校や古城小学校などへそれぞれ避難したが、わたしは八軒中学校で18日間過ごした。各地から医療関係者も来てくれ、若林区の町内会長さんなどもみなさん支援に来て下さった。

現在、私自身は、青葉区で住宅を借りて住んでいる。

私たちの地区では、12クラブ中、7クラブが活動できない状況であるが、特に4地区がひどい被害を受けている。

消防署の方と連絡を取りあったのは5月に入ってからで、分署から、「みなさんの状況はいかがですか？」と聞かれたが、震災の前に決めていた、新しく会長や会計になる予定だった方も亡くなられてしまった上、クラブ員のみなさんもどこへ行かれたかもわからない状態だった。ただ幸い、わたしの前のその前のクラブ長さんの携帯電話番号がわかったので、その方からたどって連絡を取り合い、5月に新旧の役員を集めて一度会合を持った。

若林地区

■岡 ミチ子（沖野支部支部長）

わたしは若林区の六郷に住んでいるが、東部道路の西側と東側とでは、天国と地獄というような状況だった。今回の津波が起きたとき、東部道路は避難所として指定されていなかったが、上に登って助かった人は多い。

またこの辺りは、昔はみんな田んぼだったため地盤がとても弱い地区で、耐震検査をしましょうと、4~5年前から地区全体に声掛けするなどしていた。

地震の時は、自宅とは別の場所のある建物に一人でいたが、揺れが収まってからそこを出て、自宅へ向かっている途中、余震が何度も来ているにも関わらず家の中と外を行ったり来たりしている奥さんがいたので、避難所へ行くよう促した。

屋根瓦が落ちている家も多く、上からものが落ちてこないか気をつけながら自宅へ戻るが、家の中はモノが散乱して危険な状態で、しかも近所の孫たちが私の家へ逃げてきたので、毛布などいろいろな物を抱えて沖野東小学校へ行き、3階へ上がった。

まだ避難してきている人はそう多くなく、何も持たずに来ている人が多かったが、やがて保育所の先生が子どもたちと一緒に避難してきたときはさすが食糧等も持ってきていた。また、学校には対流式のストーブが3つしかなく、お年寄りがみなまわりを囲んだ。トイレの設置は早く、組み立て式のものが夜には設置されていた。

翌日自宅へ行き、片付けをしてから、自宅へ戻った。

その後は、沖野中学校が地域の拠点的な位置づけだったので、こちらのお手伝いをした。多い時には2000人くらいの人が入り、東部道路の東側の地区からも避難者の方が来ていた。ここは土足のまま体育館へ入ってしまったので当初は大変な状況だったが、中学生がよく働いてくれていた。薪を近所からもらい、お湯を沸かしてアルファ化米を炊いた。

クラブ員のみなさんは各自、それぞれの地域で炊き出しなどをしてくれていた。

またわたしは、山形の人とも交流があるので、米などいろいろと差し入れをしてもらい、自宅で炊いて六郷小学校へ差し入れにいった。

暮らしの面では、電気は2週間くらい通じず、水道は大丈夫。ガスは時間がかかった。

沖野地区は10クラブあるが、みなさん大変な状況なので、総会は資料送付で済ませた。

■菅野 文子 さん（六郷支部支部長）

六郷地区に住んでいるが、自宅には津波は来ず無事だった。当日は仕事を終えたあと、子ども二人と一緒に自宅でお昼を食べていたところへ地震が来た。

そこで地震から1時間以内に小学校へ行ったが、津波が来るから3・4階へあがれ！と言われた。

わたしは毛布や食べ物などいろいろなモノを子どもたちと一緒に持って学校へいったが、周りの人は何も持ってきていなかったの、他の家の子にもお菓子を上げたりしていた。

しかし婦人防火クラブ員として何かしなければと思い、教員室を訪ねるが、いまのところ大丈夫ですと言われたので、具体的なお手伝いはしなかった。5時か6時の段階で組み立て式のトイレが出来上がっていた。また、6時に点呼が取られ、冷たいアルファ化米を3人で1パックという形で配布された。

翌日はスーパーの仕事だったので、子どもたちを連れて出勤。子どもたちにも手伝わせて、店頭で品物を運び出して販売するというのを10日間続けた。

その間は、電話も通じなかったの、クラブ員のみなさんと連絡を取ることも自体難しかったが、クラブ員のみなさんは各地区の中小規模の避難所で炊き出しなどの支援活動をしてくれていて、わたしがスーパーで働いていることも知っているの、ついでの時にお店に立ち寄ってそうした活動状況を報告してくれていた。

同時に、私の自宅は石油ストーブなので、ご飯を炊いて集会所へ持っていったり、売り物にならない野菜で鍋物を作って持っていったりした。なお、自宅では発電機も備えていたので温かくして過ごすことができた。

津波で家が流されて避難所で生活を送っていた人からの話では、人間関係がうまくいかないことが多かったという。避難所運営は本来自分たちですべきで、外部から支援してくれるのはありがたいが、依存しすぎるとうまくいかない。途中で当番制にしてうまくいったという。

六郷地区は12クラブ中5地区が津波被害に遭っているが、役員のみなさんとは連絡は取れており、お知らせも出している。

太白地区

■浜 邦子 さん（八木山支部 支部長）

太白地区は、海拔100Mぐらいの丘陵地で、地区内でもかつて沢地だったところを造成した地区で地盤が大きく崩れ、数百所帯が住めなくなっている。移転の話し合いをしているところ

で、秋に入ってから解体がはじまった。

終の棲家として家を建てた人も多く、ここから動かない、という人もいるが、人口は減っている。子どもの数もととても少ない。世代交代がうまくいっておらず、住民が他地区へ行ってしまっていて高齢化が進んだ側面もあり、町内会の役員もみなさん 80 代といった状況。

東日本大震災の翌日、3 月 12 日は雪で、3 月 13 日はカンカン照りになったため、500 人くらい並んだ給水車の列にいて、途中で倒れるお年寄りが続出した。その後の長い避難生活では、小中学生や大学生などが水運びなどで助けてくれた。

私たちの地区では、防災連絡会を立ち上げ、工業大学の先生などとともに、減災シンポジウムなども開催していたので、地震が来ても大丈夫と思っていたが、全くだめだった。現実と、机上の勉強とは違う。気持ちが動転した。

避難所運営はさまざまだった。地域の役員さんでも「自分が責任もつから、みんな集まれ！」といった形でリーダーシップを取ってくれる人と、管理責任が、などと言ってなかなか積極的には動かない人もいた。

震災後すぐは、自宅の石油ストーブでご飯を炊いて、一週間ぐらい食事を運んだりした。夫も運ぶのに協力してくれた。

また、数日後に消防出張所へ状況を聞きに行くが、人的被害はないとのことだった。

ガス、水道、電気がみんな使えなくなって大変だったが、とにかく水が一番困った。体の不自由なひとは水汲みもままならないので、水をビニル袋へ入れて、小さいトラックで 10 人ぐらいのところへ夫とともに運んだ。また、斜面が崩れたところから水が出るようになったので、ポリバケツでトイレ用の水を運んだりした。

わたしの家は事業をしているので、駐車場もあり、受け入れやすかったこともあって、学生さんたちを 15・6 人受け入れた。みな不安だったようで、女子学生も多かった。

■武田 和子 さん（郡山支部 支部長）

郡山支部には 17 クラブあるが、被害という被害は殆どない地域。地盤も固めだったようで、屋根瓦も落ちなかった。ただ地震がとても大きかったので、みなさん長町小学校、郡山小学校などに避難した。

わたしは当日、若林地区にいたため、息子の所に身を寄せ、3 日目ぐらいから自宅にもどり、さらに避難所へ行った。

地元の町内では、災害時要援護者の調査をしていたので、婦人防火クラブ員でおにぎりを作って届けた。町内会長のお宅はカマドもあり、お米も提供してくれたのでそれらを生かした。

避難所では、民生委員、社協、ボランティア連絡協議会の方たちもいて、たくさん人手があるので大丈夫ということだった。

それでも、小学校へ行ってみると、家は大丈夫だが余震が怖くて逃げて来ているという人がいて、話し相手をしていたら、雨漏りがしてきた。校長先生以下、先生方が頑張っていたが、中学校へ移動することになり、どうしても家にいると怖いので戻りたくないという人を中学校まで送り届けた。その後、小学校の体育館を掃除した。

電気は 3 日目にはなんとか回復。水は大丈夫だった。

5 月のはじめごろになってから、とにかくみんなで集まろうということで会合を開き、災害の体験を共有しようということ提案した。6 月になって、地区リーダーのみなさんに集まっていたら、津波に車ごと流され、夕方 6 時ごろまで漂ったものの助かったという知人に来てもらって、話を聞いた。

②全般（婦防全体としての活動や個別課題など）

■地域での防災訓練・対策と実際

○これまで訓練は地区ごとだったが、自主防災とか、学区単位で訓練しておくべきだと思った。

（防災まち歩きを子どもたちと一緒に実施したり訓練をしているが、子どもたちはとても熱心）。

- 婦人防火クラブの役割も含めてしっかりと学区単位で、避難所運営や被災者支援の在り方を決め、非常時にもスムーズに動くようにすべき。
- 地区の小中学校や公的機関は、災害時の避難所開設訓練なども実施していた（一時避難所に集合し、避難所へ移動、受付や炊き出しなど担当を決めて対応するというもの）。しかし町内会長は学校へいけず集会所へいき、学校の先生が実際はみんな対応してくれた。備蓄はたいいていの人知っている状況だが、数は足りなかった。
- 避難所訓練はやっていたが、町内会長のうちもつぶれて避難してしまっていたりした。中心となる人、リーダーがいないと大変になる。
- 連合町内会長がいなかったのので、社会福祉協議会が仕切り役になってくれたが、うまく協体制つくれなかった
- 6月に実施する防災訓練では連合町内会長さんが中心だが、実際にはそのとおりにいかないこともある。
- ある地区は震度5強になったら集会所へ、と取り決めているところもあるが、私の地区ではそうした事前の取り決めがない。
- 地域のコミュニティセンターの中の物資がきちんとは配布されなかった。
- 避難所に行っていて空になった家を狙った泥棒が出た地域もあった。

■災害時要援護者・女性の視点

- 一人暮らしの弱者の方の支援など話し合いはおこなっていたが、実践に移る前に津波になってしまった。今はみなさん、今後どうなるのかということで精一杯。
- 要援護者の方の在宅避難者の食料については、自転車で配布したこともあったがやり切れなかった。また配っていいのかもあいまいだった。
- 地震直前に、女性の視点から災害時の課題について模造紙に書き出すというようなことをやっていた。

■婦人防火クラブの在り方

- 婦人防火クラブの立ち位置がしっかりしていないため、町内会長の考え方もまちまち。
- わたしの地域では、自治会長さんのほうが、婦人防火クラブにかなりの部分を任せてくれていて、消火器の交換などもやっていたので活動しやすかった。
- 婦人防火クラブの会長が、自主防災会の副会長に入る形をとっている。クラブをととても重視してくれているので、活動もしやすい。
- わたしの地区は新興住宅地なので、人間関係が希薄なところがあり、一所懸命活動をやっているのに、婦人防火クラブが地域の防災活動の本流にうまく入れてもらえない。
- 9月に地区全体で防災フォーラムを実施し、関係機関と町内会長とが集まったが、婦人防火クラブの活動について報告すると、町内会長さんが「婦人防火クラブの活動はよく知らない」と発言してがっかりした。
- 震災後しばらく経ってから自治会の会合に出ると、婦人防火クラブの予算がゼロになっていて驚いた。交通機関の足代だけでも出してほしいといって、なんとか確保した。手弁当の活動だが、区単位の集まりなど参加しようとするとう経費はかかる。
- 婦人防火クラブの捉え方は、町内会によって違う。補助金程度の扱いのところも。

3. 今後に向けて

■組織の今後

津波によって、地域全体が壊滅状態という地区では、住民がばらばらに避難していることから、活動の見通しが立っていない。また、被害があった地域についてはいずれも、住民のみなさんが今後の生活のことで精一杯という状況にあることから、総会は資料の送付で済ませるなど、すぐに震災前と同様の活動をすぐに再開できる状況には無い地域も一部ある。

しかしながら、東日本大震災の経験を経て、地域防災活動と婦人防火クラブの重要性を、クラブ員自身が感じていることもあり、今後に向けて、自主防災活動や避難所運営における婦人防火クラブの位置づけや、活動の在り方について、積極的な発言が多く出された。

また、今回の震災を契機に、結束が大切ということを実感し、これからはやはり横のつながりが大切であると考え、まさに今月から、婦人防火クラブも含め、自治会、民生委員、ボランティアグループなど地域の関係者がみんな入ったネットワークを立ち上げることになっており、婦人防火クラブ会員向けの会報も作って配布を始めた、という地域もある。

仙台市消防局の婦人防火クラブ員へのアンケート調査の取り組みとその結果に見られるように今回の教訓をしっかりと分析すること、その上で、さらなる地域防災力の向上のため、婦人防火クラブの組織と活動の在り方について、クラブ員の思いを活かした形で、進めていくことが重要となっている。

■組織のメッセージ

- 人材の育成と体制が重要。
- 電池が一番困った。特に単一が無くてこまったので、懐中電灯と電池は本当に備えておく必要がある。
- 支部として、皆さんに申し上げていることは、「まず、自分の安否、隣近所の安否、避難所などのお手伝い」。
- 支部として、婦人防火クラブとしての心構えだから備蓄していたと思っていたがそうでもなかった側面がある。そこで「見直そう、家庭の防災、地域の防火」という赤い紙で家の中に貼ってもらうようにした。備蓄する、話し合いの機会を増やす。忘れることなく、後世に伝えることが大切だと思う。人がかわるが、変わっても継続していけるようにしたい。
- 家族で、いざという時の避難場所を改めて話し合っておく必要がある。

(ルポライター：浅野幸子)